第143号

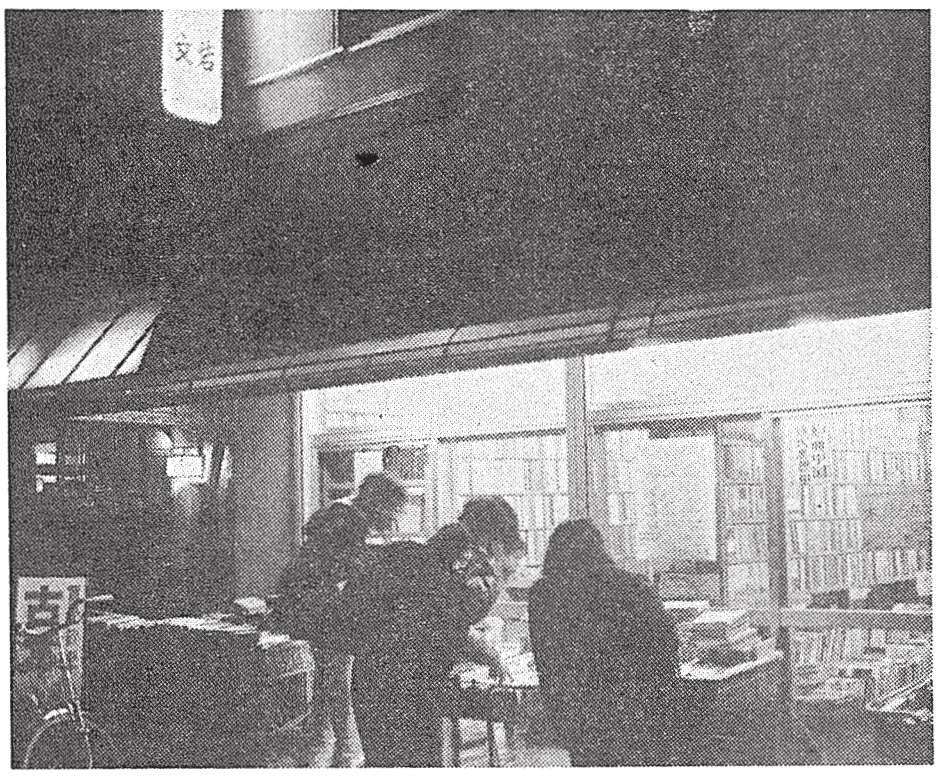
THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

関西大学通信

関西大学広報委員会
大阪府吹田市山手町3丁目

「関大正門前通り」の七不思議

橋本　昭一



夕暮れの関大正門前通りの風景点描（伊丹三樹彦氏撮影）

大学があれば、正門がある。正門の前には、学生頼りの商店街ができる。称して「正門前通り」ないしは「関大前通り」。

正門前通りの七不思議を、かぞえ歌風に拾ってみた。

一、ひとつひまもてあますゲーム・センター

この通り、一、二年の間にネオン街になった。犯人はゲーム・センターである。時々のぞいてみるが、関大生らしき姿に出会ったことがない。一号店や二号店はとっくに店じまいしているのだから、一寸事前調査をすればよさそうなものを、性懲りもなく、最近たこ焼店付きの豪華な店舗が開店した。まずは三年のいのちと見ているが果たして如何。なんでもマネージャー一人にアルバイトが二、三人で機械の管理が可能ゆえに、儲かるという幻想につながるらしい。ならばせめて、勉強に無縁な大学生がいる町で開店して欲しいものである。

二、ふたつふたりではいる喫茶店

この通りでもっとも多い店は喫茶店。すべての店のコーヒーを飲み較べた人はいないはず。

エプロンおばさんが経営していた一膳飯屋風の食堂が姿を消し、替って登場するのが喫茶店。特定の店は実によくはやっている。隣りの店は閑古鳥、この店は押すな押すなという風に。わがゼミ生が言うにミス吹田だの、ミス関大だのといわれる女性がいるところがはやっているとのこと。

スポーツ用品店の横の店を愛好される先生が多い。商学部のK先生は、朝正門をくぐる前に一杯、講義を終えて一杯、三時に一杯、帰路に一杯というほどであるが、いくらなんでもこの先生は例外。その上、この先生が座ると、たちまち周りのイスが奪いあいになるという噂も耳にした。

三、みっつみんなにきらわれる迷惑駐輪

豪華なオートバイが、あわれ、側溝に転落して、浄化槽からの排水を浴びている風景に、時折出くわす。

ハンドルに鞄の紐をとられて、二輪車を足蹴りにしている学生もある。私も一度手提げの鞄がバック・ミラーにひっかかり、無理に引っぱったら、車の方が傾き、連鎖反応で二、三台ひっくりかえったことがあるが、元の位置に戻す腕力なくすごすご立ち去ったものである。被害は歩行者が受けているのだが、二輪車の方もかなり痛手を受けているはず。なおも放置する人は、よほど厚顔の人であろう。

四、よっつよるのコンパは飯を食ってから

午後七時過ぎにこの通りを歩くと、どこにコンパ会場があるか分かる。オールド・ファッションの数え歌や学生歌が聞こえてくるからである。ゼミナール終了後六時からという臨時のコンパを、私もよくやる。この通りの裏に、サントリー・ホワイトをリザーブしてくれる店があるからである。

定刻に来ている学生は一人か二人。あとは飲む前の腹ごしらえに出かけている。「かけつけ三杯」の飯を食った学生は、それから飲みはじめ、ゼミ生一〇名全員そろうと、ボトル二本位、あっという間である。飲みながらもよく食べる。年末のゼミ旅行では、そのまたあとでお茶漬け四杯をたいらげた学生がいた。

五、いつついつもはすいてるコピー店

踏切に近い方の文房具屋は、鍵の複製もやるが、有名なのは語学の訳本販売。かつては謄写印刷だったが、ここにもワープロ化の波が押し寄せているらしい。一年分の講義を分冊で販売しているので高価である。そこでもっと多くの学生が、試験期に押し寄せるのがコピー屋である。専業店もあるが、年間二〇日は、喫茶店も本屋もこの副業に手を出している。受験生はこの店の看板で「縮少」という字を憶え、三点位損をする。

六、むっつむつかしい焼きそば稼業

この通りのメイン・ディッシュはラーメンにあらず、きつねうどんにあらず、はたまたカレーでもなく、焼そばである。一〇種類以上の焼そばを楽しむことができる。

キャベツとそばと豚肉を焼いて、ソースをかけるだけの料理なのに、結構むつかしい。

ごく常識的な器材と具を使ってうまい焼そばを食べさせる店は一軒だけである。ただしこの店はあまりに狭く、学生服を着ていない者にはあまりにも冷淡である。

理髪店の横の店は、ピーマンや人参で彩りをつけてくれるが、かつては鉄板が悪く、鉄屑を供せられる可能性があった。喫茶店の焼そばはフライパンで焼くため、そばの腰を保つのがむつかしい。目下愛用の店は、キャベツの芯が混ざるのが欠点である。ただし、この店はたっぷりと牛肉を使っている。

七、ななつなにがなくとも自動販売機

関大生はにせコインを使ったり、ガラスを割って見本だけを失敬することをやらぬらしく、駅から正門までの間に、やたらと自動販売機が目立つ。電車の切符やたばこはもちろん、証明書用写真、コーヒー、ジュース、ビール、ポップコーンにホット・ドッグ、週刊誌、ポルノ雑誌、就職情報誌、マッチ、はたまた乾電池と、なんでもござれである。

はなはだ申し訳ないことに、それに似たものが、各学部の事務室にも設置されていて、そこにコインを入れないと、ほとんどの証明書が手に入らないシステムになっている。

無愛想な店員の応待を受けるよりましかもしれないが、自販機はどうしても品物の種類が限定され味けない。

ともかくいかに同業が多くとも、サービスさえ良ければ、この通りへまだまだ参入可能である。

とくに古本屋とレストランは大歓迎である。そういう店が少ないのも不思議のひとつであろうか。

（経済学部教授）

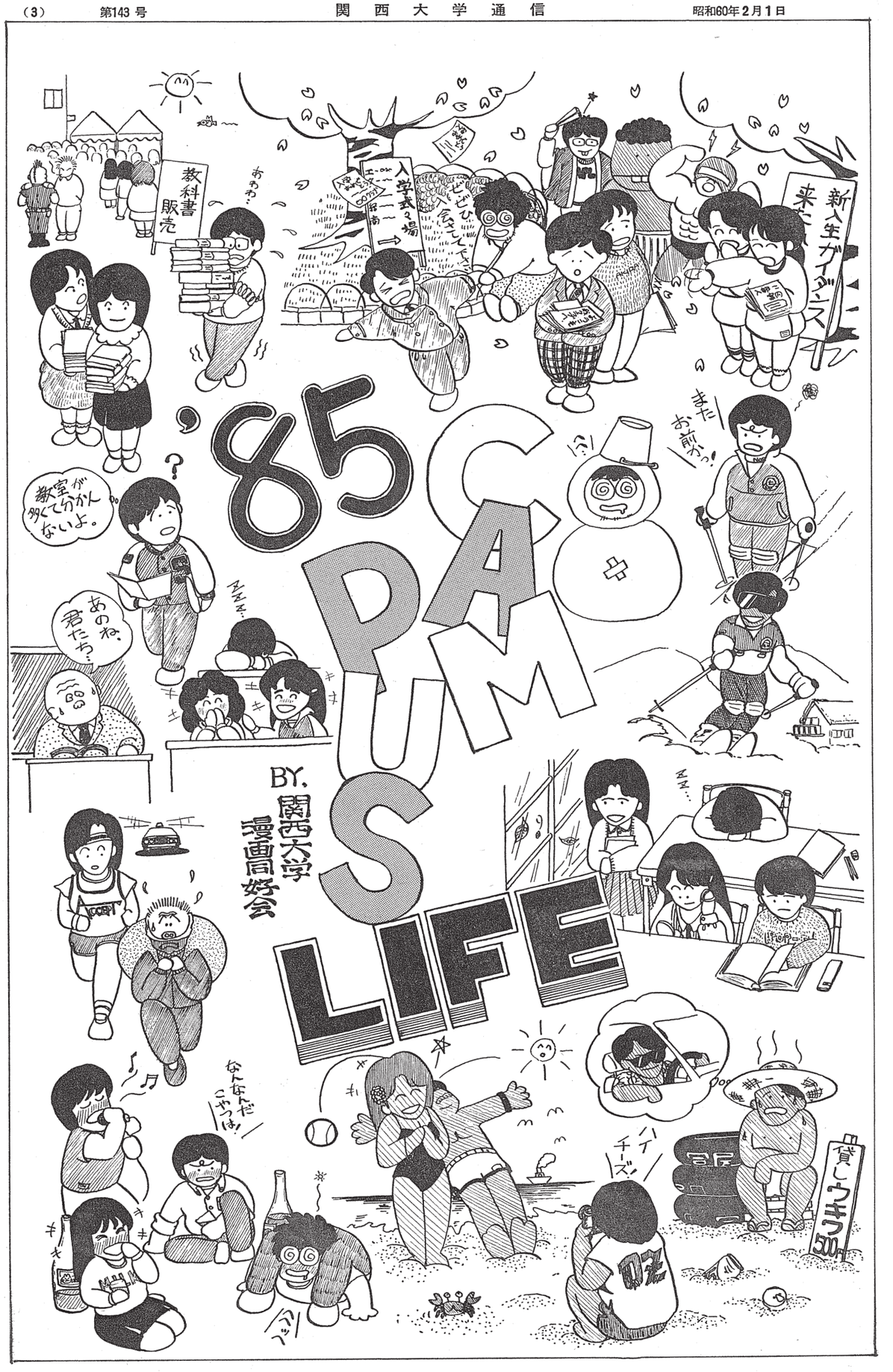
本号の内容

▼1面　「関大正門前通り」の七不思議　千里眼▼2面　受験生へのアドバイス　志願者数一覧　合格者発表は13日に　学生部短信　創立一〇〇周年記念事業と募金活動▼3面　'85キャンパス・ライフ▼4・5面　関西大学一〇〇年の歩み　関西大学略年表▼6・7面　大学とは何だろうか▼8面　ライデン大学名誉教授フリッツ・フォス博士の講演を聴いて　世界の大学　新刊紹介　編集後記

千里眼

昨今、若い人たちの間では、ことわざや格言の誤解・誤用が多くみられるという。「住めば都」ということわざもその一つらしい。原意はもちろん、どんな所でも長く住んでいるとそこに親しみが湧き住みごこちよく感じられてくるという意だが、「住むなら都市」という意にもとられているという。（その意にとるなら、「住まば都」というべきだと思うのだが、それはともかくとして）そこには、住むなら都市、それも大都市、それも東京、という現代日本の世相や考え方の反映をみることができて興味深い▼ひと頃、地方の時代などと唱えられたが、実際は地方軽視の傾向が強い。かつて過疎県に住み、過疎地住民の研究をしてきた筆者にとっては、よりその感が深い。過疎は現象的には急激な人口減少としてあらわれるが、実態としては、その地方の産業・教育・文化の面での衰退のイメージに根本問題がある。それがまた人口減に拍車をかける。都市中心、大都市中心、東京中心の考え方が益々濃厚になってきている。その象徴を「単身赴任」と「衆院定数是正」の問題にみる▼「単身赴任」は今や社会問題化するほど普遍的になっており、子供の教育、住宅事情、老親同居などの考慮すべき課題を含んではいるが、その底には都市の本拠は手離さずいつでもその利点を享受しようとする態度があると筆者はみている▼また「衆院定数是正」問題は、論理的には一票の価値を等しくするという是正は当然であって、否やを唱えることはないのだが、政治的に考えればこのまま推移すればやがて都市住民の意向のみが政治に反映してしまう恐れがある。むしろ、全国民の約十分の一が全国土の千分の五強の土地に住んでいる（東京都の場合）ことが異様だとする逆の発想も必要だろう。都市と地方のバランスのとれた発展を祈念したい。

（A・N）



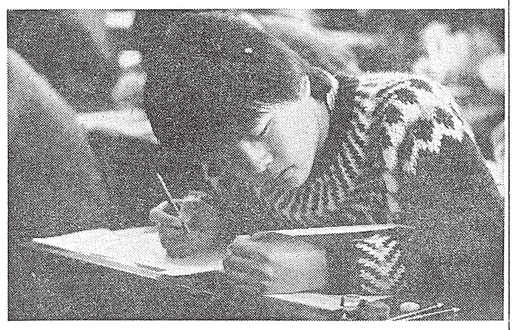
昭和60年度　関西大学入学試験志願者数（試験場別）

（昭和60年1月22日現在）

部	学部	年度	本学試験場	地方試験場 札幌	東京	金沢	名古屋	広島	高松	福岡	地方計	合計	増減
第1部	法	60	7,457	28	224	47	476	144	99	211	1,229	8,686	△ 16
		59	7,526	21	223	52	417	160	127	176	1,176	8,702	
	文	60	7,179	31	222	76	472	183	154	178	1,316	8,495	△ 314
		59	7,336	31	252	110	460	264	172	184	1,473	8,809	
	経済	60	8,717	12	87	64	165	124	108	123	683	9,400	△ 284
		59	9,067	17	112	36	160	97	108	87	617	9,684	
	商	60	11,014	29	224	68	282	175	111	200	1,089	12,103	1,140
		59	10,225	21	134	44	248	112	53	126	738	10,963	
	社会	60	11,152	17	177	51	539	188	82	155	1,209	12,361	△ 386
		59	11,333	32	280	68	406	237	149	242	1,414	12,747	
	工	60	13,050	29	175	184	1,172	272	158	194	2,184	15,234	△ 367
		59	13,753	32	140	95	1,074	229	165	113	1,848	15,601	
	小計	60	58,569	146	1,109	490	3,106	1,086	712	1,061	7,710	66,279	△ 227
		59	59,240	154	1,141	405	2,765	1,099	774	928	7,266	66,506	
第2部	法	60	925	2	13	4	72	8	3	11	113	1,038	3
		59	946	1	7	3	51	10	5	12	89	1,035	
	文	60	665	1	23	5	48	11	7	18	113	778	68
		59	638	1	18	4	23	14	4	8	72	710	
	経済	60	930	0	7	2	11	3	5	6	34	964	△ 45
		59	975	1	6	0	17	4	3	3	34	1,009	
	商	60	861	1	9	2	29	2	4	12	59	920	142
		59	745	2	3	4	13	2	2	7	33	778	
	社会	60	777	0	10	1	23	1	2	2	39	816	166
		59	629	0	6	2	3	2	2	6	21	650	
	小計	60	4,158	4	62	14	183	25	21	49	358	4,516	334
		59	3,933	5	40	13	107	32	16	36	249	4,182	
合計		60	62,727	150	1,171	504	3,289	1,111	733	1,110	8,068	70,795	107
		59	63,173	159	1,181	418	2,872	1,131	790	964	7,515	70,688	

（注）△は減を表わす

受験生へのアドバイス



落ち着いて冷静に

誤字や脱字、よく点検を

2月1日から6日まで

本学の昭和六十年度入学試験は、二月一日の法学部を皮切りに六日まで、工・経済・商・社会・文学部の順に、第一部は千里山学舎、第二部は大学舎において行われます。また、地方試験は二月三日に金学部の第一部、第二部とも、札幌・東京・金沢・名古屋・広島・高松・福岡の各地において実施されます。

受験生諸君は、採点への公正さを希望に抱えて、日夜勉学に励み、この入学試験に臨みたいと思います。これまで鍛錬してきたその実力を十二分に発揮し、よい結果を勝得したいものです。

ここで入学試験に臨む諸々のアドバイスを筆手のべることにしましょう。

◎まず全問題に目を通す

試験開始の合図とともに、まず問題全体をながめ、自分なりの解答順を決めます。まず、解答すべき問題が分かれば、その問題からとりかかることです。なぜかしら悪い問題は、他の受験生も同様に感じているはずです。解けないとき焦ることはありません。

◎問題の指示をよく読む

問題は最後まで正確に、少なくとも二回は読んで、解答条件（例えば、「正しいものを選べ」なのか「間違っているものを選べ」なのか）を正しく理解するときです。早合点は絶対に禁物です。

◎きれいな答案を

本学では、数学を除く全ての教科・科目にマークシート方式が採用されており、機械採点します。マーク部分については、解答のマーク部分に誤入してください。マークする場合、一問ごとにするのか、それとも全問解答されたあとでマークするのかを、最初から決めておくようにしてください。また記述部分についても、書き間違えた場合、きれいに消してから答案用紙に清書する心がけが必要です。

記述部分は自分だけがわかっても、採点者が判読できなければなぬ。昭和六十年度より新入生（入学金を除く）学費等奨学金」を対象とする「入学時貸与奨学金」（一種奨学金）を創設することを検討中であり、決定次第、合格者に通知して周知をはかる予定である。

◎休憩時間の過ごし方は

試験の始まりよりも終わり近く、一時間目より二時間目が、一時間目より二時間目の方が注意力が散漫になり、ミスが発生しやすいといわれています。試験終了前の五分か十分間は、必ず見直しの時間に当てることです。全問解答してマークシートを塗ったり、アキマケなどいないかどうかといって、見直しを怠ると単純なケアレス・ミスを発見できなかったりします。早合点は禁物です。

◎休憩時間の過ごし方は

終わった試験のことを考えたり

関西大学の年の歩み

「権利意識に目ざめよ」理念に燃えて願宗寺で弧々の声をあげる

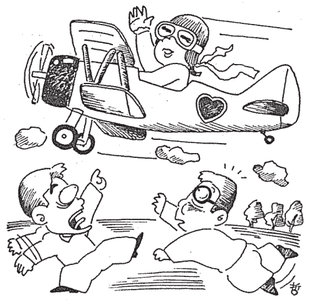
第一回卒業生たち。卒業式には文部大臣榎本武揚も出席した

「正しから守れ」。信念を貫いた児島惟謙（創立時の

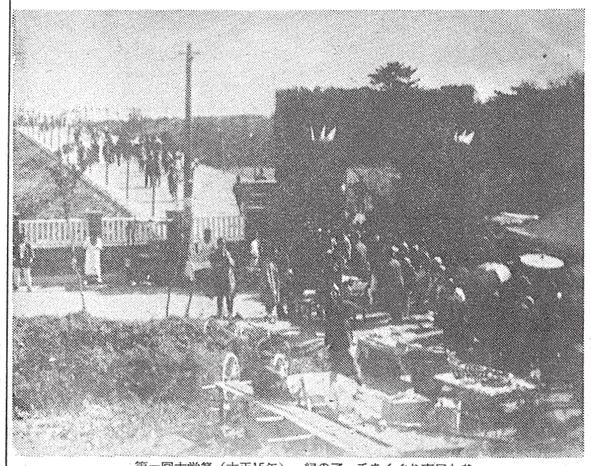
大正11年に大学昇格。総理事・学長山岡順太郎は「学の興化」を理念とし、拡張に努めた

第一回海外留学生（大正4年）の岩崎卯一は戦後学長となり、「関大ルネッサンス」を唱えた

男女共学の先駆け（大正12年）。聴講生北村兼子はパイロット免許を持つ〝翔んでる〟女性だった



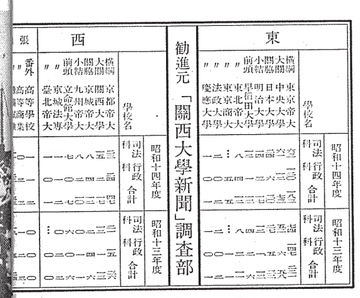
相撲部は最も古いクラブ。竹田繁七ら学生横綱3人、全日本団体優勝2回



第一回大学祭（大正15年）。緑のアーチをくぐり市民も参加。やがて名物行事に

ロサンゼルス五輪（昭和7年）三段跳びで大島鎌吉は日の丸をあげた。ベルリン大会（同11年）には6選手が気をはく

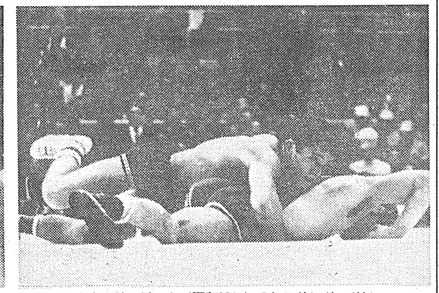
応援団の行くところ、紫紺の征旗と千成びょうたん（太閤の馬印）がある



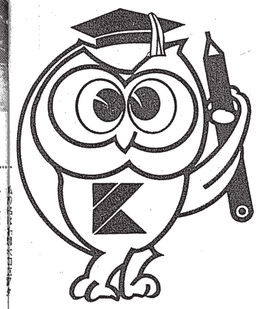
勧進元「関西大學新聞」調査部

法曹会で活躍する先輩は多い。昭和15年1月25日付「関西大学新聞」93号

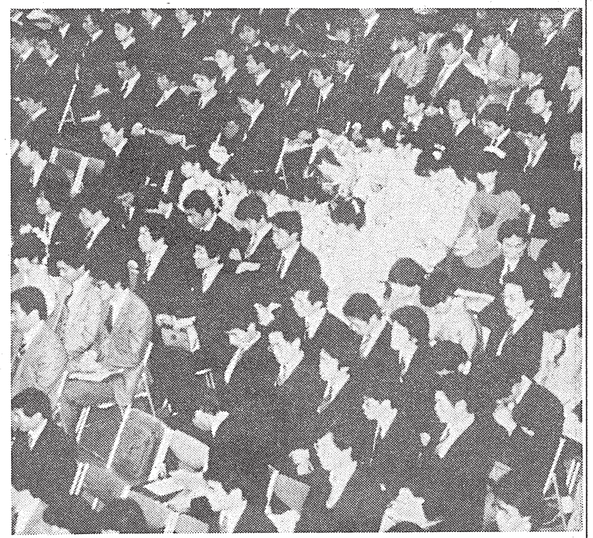
蛮カラで鳴る予科生は「偉大なる馬鹿」の幟を押し立ててストーム



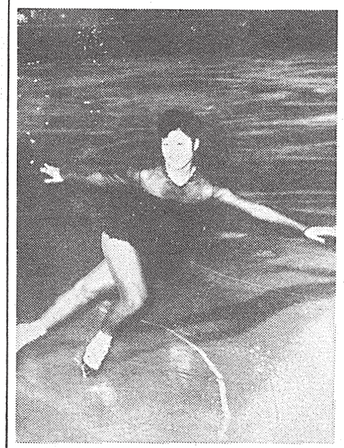
東京オリンピック（昭和39年）のレスリング・グレコローマン・バンタム級で市口政光が金メダル



国際化時代。中国の盧鄢、復旦両大学と学術・研究の相互乗り入れ



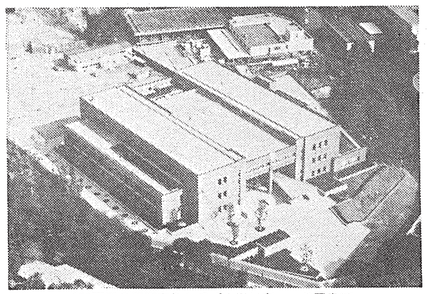
昭和58年度卒業式、新学士4,800人誕生。各界で活躍する校友は17万余人



氷上に華麗な演技をみせる佐藤久美子（旧姓大川）。昭和43年2月、第五回ユニバーシアード（インスブルック）で優勝

1,300年の眠りからさめた高松塚の飛鳥美人。

野球部は全国制覇の宿願を達成し、昭和31年（村山実―上田利治）と同47年（山口高志―田中昭雄）は神宮球場で舞った



150万冊の収容力をもつ〝大学日本一〟の図書館

願宗寺、レスリングの写真は、毎日新聞社提供。総合図書館は徳山喜雄氏撮影。

年史資料編集室作成

関西大学略年表

【明治】

19・11・4　大阪・西区京町堀・願宗寺において関西法律学校を創立。昭和員の教室で初講義が行われる。

12・13　志願者多数のため東区淡路町に移転する。

20・4・24　生徒数増加（在籍三五二名）にともない、北区河内町・興正寺に校舎を移転する。

22・4・29　創立者たちの胸御、ボアソナード博士が来校し、前途を祝福する。

9・16　第一回卒業証書授与式を挙行（卒業生十七名）中之島・自由亭で祝宴を張る。

26・12・14　司法省指定学校となり、卒業生に司法官試験の受験資格が与えられる。

33・7・6　社団法人組織の設立を認可される。

36・11・18　専門学校令による専門学校として認可される。

12・25　西区江戸堀に洋式木造二階建の新校舎が完成し移転する。

37・8・5　経済学科を増設し、学制を法律学科と経済学科に改める。在学生総数六四〇名。

38・1・6　社団法人私立関西大学と改組、改称する。

39・9　商業学科を増設する。

10　学友会（自治会）を結成する。福島学舎に移った四十年一月より活動を始める。

12　北区上福島に新学舎完成し、移転する。

45・9　学生数の増加（在学生一、二二六名）にともなう増築校舎が完成する。

【大正】

4・12・9　第一回海外留学生を欧米に派遣する。

9・3　財団法人関西大学と改組、改称する。

10・5・16　大学昇格促進のため、学生たちが茶屋・三笠山に集まり、血判の誓約状を作り、学校に提出する。

11・4　千里山に予科校舎完成し、五月から授業開始。

6・5　大学令による関西大学として認可される。法学部（法律、政治の二学科）商学部（商業学科）の二学部と大学予科を併置。

9　関西大学学歌を選定。服部嘉香教授作詞、山田耕筰作曲。

13・4　商学部に経済学科、専門部に文学科を増設する。

8　商学部を経済学部と改称する。

14・2　法学部を法学部と改称し、文学科（哲学、英文学の二専攻）を増設する。福島学舎に移った四十年一月より活動を始める。

15・10・23　千里山グラウンド（現第一グラウンド）、クラブハウス（現保健管理センター）が完成し、その落成式を兼ねて第一回大学祭が行われる。このころ在学生総数三千余名。

【昭和】

2・3　千里山学舎本館が完成する（現第一学舎の建設に

4・4　千里山学舎に大学院を開設する。

9・22　天六学舎が完成し、専門部を移転する。

5・4　専門部に第一部（昼間部）を設置する。

10・3　経済学部を経済学部と改称する。

18・12　学徒出陣始まる。

20・1・4　人文科学研究所を開設する。

19・4　法学部法学部、経済学部を経済学部と改称。

9　終戦後はじめての授業が行われる。学窓に溢れる学友も多かった。

23・4・1　学制改革により新制大学に移行。法・文・経済・商（第一部、第二部）の四学部でスタートする。

25・4・1　新制大学院・修士課程法学、文学、経済学の三研究科を開講する。

26・3・1　学校法人関西大学に改組、改称する。

4・14　東西学術研究所を開設する。

28・4　大学院・博士課程法学、文学、経済学の三研究科を開講する。

29・4　考古学資料室を開設する。

33・4・1　工学部を設置する。

経済・政治研究所を開設する。

10　名神高速路の学内通過計画に全面的反対運動起こる。トンネル案で解決をみた。

37・4　大学院・修士課程商学、工学の二研究科と博士課程商学研究科を開講する。

39・1　工業技術研究所を開設する。

4　大学院・博士課程工学研究科を開設する。

9　専門図書館を開館する。

42・4・1　社会学部を設置する。

視聴覚教室を開設する。

46・3　電子計算機室を開設する（五十七年四月に改組し、情報処理センターとなる）。

4　大学院・修士課程社会学研究科を開講する。

47・3　考古学研究室が飛鳥高松塚古墳の発掘調査にあたり、極彩色の壁画を発見、その成果は注目を浴びた。

48・4　大学院・博士課程社会学研究科を開講する。

49・4　部落問題研究室を開設する。

50・4　飛鳥文化研究所・植田記念館を開設する。

51・4　一般教育等研究センターを開設する。

56・5　学務課分室国際交流室を開設する（六十七年四月、国際交流課となる）。

58・2・16　自動車、二輪車による通学、通勤の全面禁止。

3・6　中国清華大学・復旦大学と協定を結ぶ。

10・14　創立一〇〇周年記念事業として記念会館（仮称）、セミナーハウスの建設、研究・教育振興基金の設定などが決まる。

59・10・28　総合図書館・情報処理センターの落成式を行う。大学図書館としては模範、機能ともにわが国のトップクラス。六十年四月に開館する（予定）。

60・2　在学生総数は、第一部、第二部、大学院をあわせて約三万二千名。

61・11・4　創立一〇〇周年記念日。

（年史資料編集室）

何だろうか

学生諸君はいま年度末試験に取り組まつつ、今と自分の一年の学習のことを振り返り、自己の学生生活のことの意味を問い返しているのではなかろうか。数々の問もまた、答案の束を前に、時に満足の溜息の漏れる問題意識の豊かさに喜びを感じ、また時に無力感をいたいたりしながら、「大学とは何だろうか」と自問することもある。

ここは毎回切った大学論ではなく、どちらかといえば教育の現場をうけとめた体験的大学論ともいうべきものを話先生方に論していただいた。講義やゼミナールでの経験や、「時代的現論」といわれるもの教育の場での受けとめ方など、その切り口は多岐にわたるけれども、いずれも大学教育の理念と現実についてきくのに示唆を与えるものである。

この企画は一方では大学人を自問と奮闘しているの学生諸君をも念頭においている。諸君の大学についてのイメージの形成をいくらかでも助けることができればまいである。

（安岡）

＝50音順＝

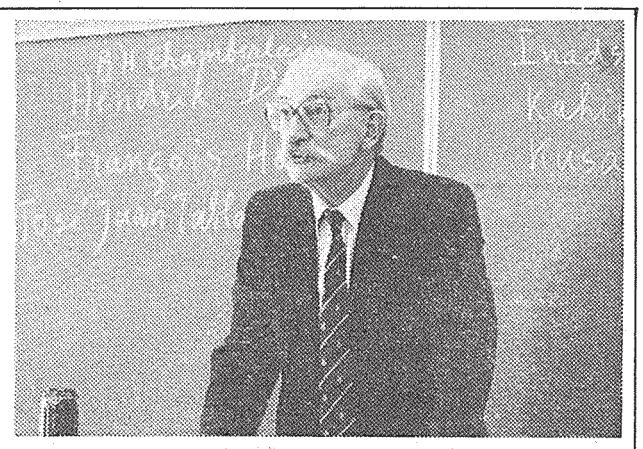
気をつけよう ブランド志向と偏差値教育

井上　昭一

知人の夫妻が、こぶみ付けてほされたのである。

教育の荒廃はひ同じて、私は他の職場に従事していない人々よりは、少しは幅ていたつもりである。いようとは……。結局、何も解っていないことを痛感させられた。三語葉舞台のこのウッソーノ、ホンとうなのでしょう？　もしそのとおりだとしたら、いつ、いかなる場所で言ったのでしょうか？　私はそうしてその人物を探さねばならないのです。彼は歌人か？　歌人ネオンシスに当面した途中、「ルネオンシスに当面した途中、「ルネオンシスに当面した途中、「ル

ライデン大学名誉教授 フリッツ・フォス博士の講演を聴いて



フリッツ・フォス博士

オランダのライデン大学は、創立四百年を越え、ヨーロッパの学術・文化の中心として、多くの著名な学者・文化人を輩出してきた大学である。世界の大学の中でも日本学の講座を設けたのは、ライデン大学が最初で、その創設は一八五五年のことであった。初代教授のホフマン博士が、名著『日本文典』を刊行するなど、ヨーロッパにおける日本学研究の基礎を確立したことは名高い。その第四代教授になられたのが、フォス博士である。博士は、海外における日本学研究の総本山ともいうべきライデン大学の伝統をうけつがれただけでなく、一九六九年には、日本学研究センターを創設されるなど、日本学の興隆に画期的な功績をあげてこられたのである。

その多年にわたる顕著な功績を表彰するため、大阪府は去る十二月八日、博士に賞を贈呈した。その繁忙なスケジュールを割いて、同十日、博士は本学を来訪され、「関西随一を誇り、百年の伝統に輝く関西大学で講演することを光栄に思う」といわれて、日頃の研究の精華を披露された。

フォス博士の学位論文は「伊勢物語の研究」であるが、その研究領域は古典文学にとどまることなく、日本の古代から現代まで、あらゆる分野にわたっておられる。その点からいえば、今回の講演もその一端にすぎないが、「西洋の俳人」と題して、日本の俳句の影響、各国の自国語で作られるいわゆる西洋俳句について、広い視野から縦横に論じられた。

博士のきれいな日本語、わかりやすく説得力のある説明、ユーモアに富んだ話ぶり、その該博な講演の内容を、ここに再現することができないのは残念である。しかし、不充分なことは承知の上で、あえて以下に大要を紹介しよう。

戦後のヨーロッパでは禅が人気をえたように、俳句も今までになく盛んになった。オランダでも、俳句の会が結成され、機関誌も発刊されている。しかし、俳句が西欧に紹介されたのは、随分昔のことで、十九世紀初頭、二十年間も日本に滞在したツーフは、オランダ人の最初の俳人であった。彼は日本語や句作に精通しており、その俳句は当時の日本の句集にも採録されている。外国人で彼ほどになるのは容易なことではない。

西洋俳句の先駆者は、メキシコ人のタブラダである。一九〇〇年に日本に来たことがあるが、その最も俳句的な詩は「ラ・トルトゥガ（亀）」という一句である。

Aunque jamás se mude/
a tumbos, como carro
de mudanzas,/va por la
senda : la tortuga.（3行）

栖を変えることなく
引越しトラックのように
揺れて歩む　亀

このスペイン語の「ア・トンボス」に魅力があり、「亀」の一語で全体を引き締めている。5・7・5が十七音節ではないが、それでもスペイン語で聞くと、なんとなく俳句のリズムになっている。

俳句について最初に本格的な論文を書いたのはイギリス人のチェンバレンで、続いてドイツのフロレンツ、イギリスのアストンやポーターも俳句について紹介している。しかし、これらは専門家に影響を及ぼしたに過ぎなかった。

もっと広く俳句を一般に普及したのは、フランス人のクーショである。日本の俳句を仏訳し注釈を加えたり、自作の俳句集も出版した。これに刺激され、多くのフランス人が句作するようになった。ドイツでも、有名な詩人リルケが俳句に興味を示し、フランス語で俳句を作っている。一九二〇年、フランスの著名な雑誌が十人の詩人の俳句を特集している。

アメリカでは、写象主義・表象主義と呼ばれる自由詩の動きが起こった。主唱者はパウンドで、たしかに俳句の影響が顕著である。ローウェルは、詩集のタイトルを『Pictures of the Floating world』として浮世絵から借りている。その第一章は俳句に似た短詩十九編から成っている。

西洋の俳人と称されるこれらの詩人たちの活躍は、二十世紀の当初二十年間で、以後なぜとなく消滅する。俳句熱の再燃はそれから三十五年経ってのことである。

第二次大戦後になって、日本文化への関心は再び盛んになった。禅と俳句への興味も刺激された。禅の心の文学的表現が俳句であると解釈されるようにもなった。私は俳句と禅とは別個のものと考えるが、ある俳句には、たしかに禅画と称される墨絵に似たところがある。「古池や　蛙とびこむ　水の音」には、悟りの境地が表されているといえよう。しかし、どの俳句にも、このような深遠な意味が隠されているとは限らない。

私の最も好きな句は、

蛸壺や　はかなき夢を　夏の月

である。

明日の運命も知らず、はかない夢をみている人間の世界を象徴している。美しい夏の夜が目に浮かぶ。日本人はこの句を素直に鑑賞できるが、西洋人には理解が困難である。蛸壺が西欧では知られていないし、捕まった蛸がどんな目にあうかも想像できない。「夢を」の「を」には「見る」という語が隠されているし、主語をどこかから探してこなければならないのである。

オランダの俳人はじめヨーロッパの俳人に共通していえることであるが、いわば二人の神様が存在している。一人は禅の鈴木大拙、もう一人はブライスである。ブライスは『禅と英文学』や日本の俳句の翻訳などを多く著している。オランダの俳人の多くは、二人の本を読んでいて、俳句には深い思想があるべきだという先入観をもっている。そのうえ、厳しい戒律を信奉して「5・7・5の三行、十七文字で完結すべきだ」という形式にこだわりすぎている。この場合、十七文字というよりも、ヨーロッパ語の十七音節である。

オランダ俳句の一例をあげる。

Mijn hut Staat open / (5)
ik trek over de velden/(7)
tot aan de einder. (5)

庵（いおり）の戸が開き
広野を逍遥す
地平線まで

詩としては悪くないが、無理に日本的効果を出そうと、庵という語を使っている。日本でもオランダでも、庵で暮らす人はもういないのに。しかし、西洋の音節と日本の十七文字の「文字」の違いがわかるであろう。オランダの俳句では、言葉の数が多くなり、日本語の句よりも冗漫になる。人称代名詞、所有代名詞、冠詞をはぶくことはできない。動詞の活用も複雑である。アマチュア俳人には、一見、たやすく作れそうなところが俳句の魅力である。下手な俳人は、正常な文を書いて十七音節に短縮し、三行に分けると、もう新しい一句ができた気になる。

私は、しばしば、オランダの俳句の会で、日本の有名な俳人でも5・7・5を必ずしも守っていないことを説き、「俳句の形式から脱け出て、俳句的表現の方を重視すべきだ」と忠告しているが、私の呼び掛けはオランダの諺の「砂漠で喚く」と同様である。タブラダの「亀」の句のような俳句こそヨーロッパ語での句作の手本になるであろう。西洋俳人が俳句の中に、ことさら深遠な意味を求めることも気掛かりで、淡々と自然な態度で句作してほしいものだと思う。西欧文化からの逃避によって失ったものを、俳句信仰で埋めようとされては困るのである。

それでも、西洋に起きている俳句熱は、私にとって嬉しい傾向である。俳人たちは句作を通して日本文化全般への興味を持つことになり、それは自然と日本への理解を深める道に続くからである。

（文学部教授）

文学部学術講演会

十二月十日午後二時半から

有坂隆道

世界の大学

ミュンヘン大学

ドイツ・バイエルン国の「メルヘン王」ルートヴィック二世の祖父ルートヴィック一世は、孫に劣らぬロマンチストで、スペインの舞姫と浮名を流し、それがもとで退位した話は有名である。この王が、一八二六年ミュンヘンに大学を移し、文化の興隆に努めた。

現在、二十の学部で三万人に近い学生数は、進学率二十五%の西ドイツでは随一の規模。もっとも卒業できるのはその四分の三。

こうした人気は、もちろんミュンヘンが西ドイツの人々にとって心の故郷であることによろう。しかし、大学のあるシュヴァービング地区は、十九世紀の後半以来、ヨーロッパの芸術文化の先進地域であった。その余情が今なお若者を魅きつけるように思う。

なお、写真のショル兄妹広場の名はナチス下の白ばら抵抗運動の闘士にちなむ。

（法学部助教授・竹下　賢）

BOOK 新刊紹介

文学部教授　横田健一　綱干善教　編同

『飛鳥の歴史と文学④』

（塙々堂・二三〇〇円）

関西大学飛鳥文化研究所が開設されたのを機会に、関西大学と朝日香村共催による「飛鳥史学文学講座」が毎月一回、明日香村中央公民館でひらかれ、ことしで満十年をむかえる。この講座の講演は単行本として出版され、これまで『飛鳥を考える』三冊、『飛鳥の歴史』三冊があり、本書は第七冊目。八名の本学教授による講演が収録されている。以下、そのタイトルと要点を紹介しよう。

まず横田健一教授の「天平の後宮――聖武天皇をめぐる女性たち」。教授は『万葉集』や史書をひもときながら当時の宮廷のようすをわかり易くのべられる。

ついで有坂隆道教授の「古代水時計――飛鳥水落遺跡は水時計ではない」。科学史を専攻される教授は水時計の原理から説明され、奈良国立文化財研究所が発表した「水時計説」の誤まりを痛烈に批判される。

綱干善教教授は「近世紀行文にみえる飛鳥の遺跡」と題して本居宣長と『菅笠日記』を解説。上井久義教授は「姻族の伝承と言霊――三輪・賀茂伝説の再検討」を、中農昌三教授は折口信夫の『死者の書』を解説される。小川悟教授は「古代伝承の系譜」、青木晃教授は「南山の抒情とその文学」、工学部の亀井清教授は「古鏡のなぞ――錆びた古鏡に語らせる」と、それぞれにご専門の立場から興味ある講演を展開される。既刊の六冊とともに本書もバラエティに富み、充実した講座を知りうる。

（泉　澄一）

経済学部教授　春日淳一著

『家族の経済社会学――パーソンズとルーマンにひきよせて――』

（文眞堂・一八〇〇円）

「本書は、うまくいけば、家族をめぐる価値の風化……といわれる現象にいささか光を当てることになる」、と著者が冒頭で述べているように、この書は理論社会学における二人の巨匠に依りつつ、家族は愛や真理を上位メディアにしたシステムであったし、またそうであってほしいという著者の価値意識を潜めて、現代家族を理論的に分析したものである。全体が家族の経済行動（＝財制御行動）を類型論的（タイポロジカル）に分類し関係づけるという緻密な作業に費やされているのであるが、最終章の「家族と価値」では、抑制の効いた、この潜められた著者の価値観が表出されていることによって、社会科学における分析が、必ずや分析主体の価値意識を支えにして行われるのだ、ということに気付かせてくれる。かといってそれが容易にもち出されているわけではない。家族の経済的行動分析の全体が、パーソンズのA・G・I・L図式、位相運動、パターン変数図式そしてルーマンの複雑性縮減図式を駆使して展開され、それ自体がパーソンズ・ルーマン理論への格好の導きともなっているように、著者が家族を対象としつつ、経済学と社会学を架橋しようと努めてきたことの結論でもあるからである。

恐らく著者はこの書を著すことによって、否応なく「価値」が風化していく現状に抵抗の意志を表明したかったのだろうと思われる。

（大塚　忠）

社会学部教授　田宮　武著

『文学にみる差別表現論――「ピノキオ」と「破戒」をもとに――』

（明石書店・二〇〇〇円）

本書は、著者のこれまでの差別語・差別表現問題に関する研究の総括の書と言っていい。綿密な資料の検討とフィールドワークを背景とする分析は読者に知的刺激を与えずにはおかない。しかも論述はとてもわかりやすい。また、差別問題のみならず（児童）文学に関心のある人々にとっても興味深いものとなっている。広範な読者に読み継がれていくこと必定であろう。

『ピノキオ』の考察においては、「障害」者差別表現問題が取り上げられているわけであるが、単にそれにとどまらず他の差別図書（児童文学）や差別問題に積極的に取り組んでいる作品の紹介、著者の「差別表現論」の理論的支柱をなすと思われる「ことば・表現の社会性」についても考察が加えられており、入門書としても推薦できる。『破戒』の考察においては、多々ある先行研究を凌いで『破戒』論に新たなる一歩をつけ加えている。それは、作者・作品・登場人物・先行研究者等々にみられる差別意識の徹底的な追及である。これは、否応なく読者自身の差別意識を洗い出す。

全編を通じて感じられることは、著者の誠実な研究態度と人間解放への情熱である。この情熱は読者の心を打たずにはおかない。一読を推薦する所以である。

（小原　仁）

P・R・ランキラー著
工学部教授　山岡三郎ほか訳

『土木繊維――シオテキスタイルの利用法――』

（森北出版・七〇〇〇円）

土木繊維布の土木構造物並びに土木工事への適用は、今日かなり広く世界の各地で行われているが、わが国では意外にもこの傾向はあまりみられない。この時期にランキラー氏の名著の翻訳が出版されたことは極めて有意義である。

本書は、第一に、土木用合成繊維布は主として土中に挿入されて水流の影響を受けることを考慮し、これに対するこの種の布の機能及び多種類の布の特性を説明している。第二に、この種の布の多くの使用例について説明し、その各例毎につき使用する布の果たす役割と有効性について基本的に述べている。第三には、この種の布の使用に際して行うべき試験法と、それらに必要な機械器具について説明している。

この種の布の使用が欧米において急増したのは最近の五年間であり、原著が出版されたのは一九八一年であるが、訳者のわが国におけるこの使用のおくれをすみやかに取りもどそうとする熱意に敬意を表し、格好の原著の内容を紹介する訳者の目的は、訳文の平易さにより充分果たされると確信する。

（田中　茂）

元工学部教授
非常勤講師　井本　稔著

『私にとっての化学』

（化学同人・一五〇〇円）

本書は井本先生が最近主として化学関係の雑誌に書かれたエッセイなどをまとめたもので、その内容は多岐にわたり、必ずしも化学には限られていない。例えば第Ⅰ章は新入生あるいは卒論を開始する学生諸君への先生らしい心温まるアドバイスが収められているが、それと同時に現在進行中の日本の軍拡路線に対する危惧の念も遠慮深く述べておられる。軍拡による均衡平和論がいかに危険なものかは論ずるまでもないであろう。

Ⅲ章とⅥ章は先生の学問歴、研究歴といったものであるが、それらを含めたⅡ章以下は学問、研究はどうあるべきか、またそれらを行うことがいかにすばらしく、いかに楽しいものであるかという先生の「学問のすすめ」になっており、先生の学問への情熱がにじみ出ている。また「科学の知識の進歩はいつでも既成の知識ないし理論への反逆として行われる」（六〇ページ）という言葉も先生の強調したいことの一つであろう。最後の章の「敗戦前後の日記」は風化しつつある当時の状況の一面を知る上での貴重な資料かもしれない。当時、一学生として先生のすぐそばで右往左往していた小生にとってはまた別の感慨もあるが。

それはともかく、化学系以外の人にも読んで欲しい気がする。

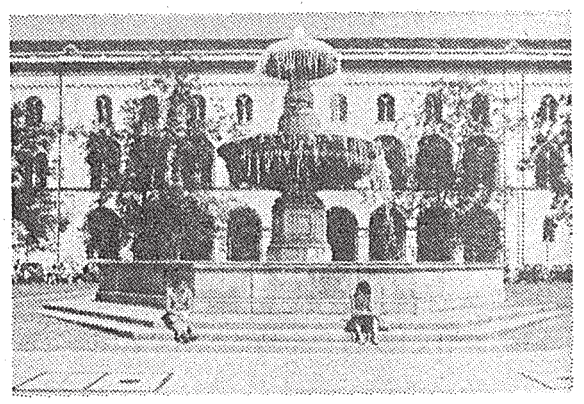
（大岩正芳）

▶編集後記◀

今年も受験生諸君を関大キャンパスに迎える季節になった。本号は、帰路にでもこれを読まれた受験生諸君に本学あるいは大学そのものについて少しでも予備知識を得ていただけるものにするということを一つのねらいとした。

「関大一〇〇年の歩み」は年史資料編集室の御尽力により、写真とイラストを中心にエピソードをまじえた関大史として親しみのわくものになったと思う。漫画同好会の「キャンパス・ライフ」、および巻頭の橋本教授の随想は、側面からみた大学紹介でもある。

六・七面の「大学とは何だろうか」は、講義をはじめ各先生にとって身近かな素材をつうじて、この問いに答えていただいた。いま一年の学習の成果を試されている在学生諸君にとっても、各人の学生生活を自省する機会となるだろう。

（野村・安喜）

大学を象徴する学舎